

## 編集後記

第16号から印刷物としてではなく、電子媒体として発行することになった。この第17号で2冊目となる。これまでと同様に名古屋大学附属図書館のレポジトリに登録されるとともに、技術教育学研究室（横山研究室）のHPに掲載される。研究室のHPには、室報全体をPDF化したものを掲載している。

[http://gi.jyutukyoubuikugaku.blogspot.com/p/blog-page\\_58.html](http://gi.jyutukyoubuikugaku.blogspot.com/p/blog-page_58.html)

冒頭のロシア語の論文（コトリヤーホフ・ロジナ共著論文）は、ロシアにおける中等教育における若者の職業訓練の問題を扱った論文で、著者による英語翻訳をあわせて掲載しているので、その具体的内容については英訳を参照していただきたい。

翻訳「いわゆる準備練習について」（オットー・サロモン著）は前号の「製図とスロイドの関係について」に引き続き、サロモンが1905年に出版した”I Pedagogiska frågor”（『教育学の諸問題』）の中に収録された論説の一つを翻訳したものである。今回翻訳した論説は1895年に書かれたもので、最初は“Slöjdundervisningsblad från Nääs”（『ネース・スロイド教育新聞』）で発表された。次号でもサロモンの論説や評論を翻訳して本誌に連載する予定である。

本研究室の前身である技術教育学講座を担当された故佐々木享教授が亡くなってから3年が過ぎた。その1周年の集いを2016年5月17日に開催したが、その際にご遺族の方から頂いた残金があり、それを原資とする基金を有効に使う方途を考えてきた。この2年間本研究室では院生を中心に、Kathleen Thelen”How Institutions Evolve: The Political Economy of Skills in Germany, Britain, the United States, and Japan”

(2004)の日本語訳に取り組んできて、一応の完成を見た。本書はそのタイトルが示すように、4ヶ国における技能形成の国際比較研究である。とても難解な本であり、日本ではまだ翻訳が刊行されていない。そこで監訳者として東京大学経済学部の石原俊時氏に加わっていただいて、その訳をさらに1年間かけて再検討し、先の基金をもとに2019年10月に大空社出版から刊行する予定である。それと同時に2019年11月23日午後1時から5時にかけて「佐々木享没後5周年記念シンポジウム」を名古屋大学教育学部大講義室において別紙のような内容で開催する予定である。第1部では、経済学史の石原俊時氏と政治学の穴見明氏（大東文化大学）から、それぞれの専門の立場からの本書の研究上の意義について語っていただく予定である。第2部では、「佐々木享と民間研究運動」と題して、天野武弘氏から「産業考古学会とのかかわり」、依田有弘氏からは「技術教育研究会とのかかわり」について語っていただく予定である。その後（午後5時半過ぎから）懇親会を南部生協食堂（1階）で開き、多くの参加者に佐々木享先生の思い出を語っていただく場をもちたいと考えている。別紙を見ていただき、多くの方が参加されることを期待したい。

（横山悦生）